田中正造の「治水論」と現代への継承

Shozo Tanaka's Flood Control Theory and Succession to Present Age

中村 愛子* 下村 彰男**

Aiko NAKAMURA Akio SHIMOMURA

Abstract : The starting point of the pollution of our country is an Ashio mineral pollution event of the 19th century. Shozo Tanaka described flood control theory about the necessity of the protection of natural environment through practice by this event. The purpose of the present study is to consider how to succeed to from Tanaka's flood control theory to a modern citizen volunteer concretely. As a result, Shozo Tanaka's flood control theory has four sides of "Traditional river technology by character of geographical features and water", "Erosion control as the head of a river training", "Flood control the mountain and river on earth", and "Ideal way of the man activity that enjoys the life of the natural gift". At the present period, 'Watarasegawakenkyukai', which was succeeded to through elaborate study of Shozo Tanaka's thoughts, was the center of the group that developed with the activity as a recovery of natural environment. Tanaka described the ideal way of the flood control and the man activity along working of natural environment. On the other hand, it was considered that a present civic group aimed at the recovery for past natural environment, and was adapting oneself to present natural environment.

Keywords: Shozo Tanaka, Soil and water conservation theory, Protection theory, Traditional river technology, civic group

キーワード: 田中正造, 治山治水論, 保護論, 伝統的河川工法, 市民団体

1. 序論

わが国の公害の原点は19世紀の足尾銅毒事件である、とされている。田中正造（以下、田中）は、銅毒事件の下流域被害民の立場から銅毒反対運動を展開し、「治水論」を述べた人物である。

田中の「治水論」は、その後の河川計画に取り入れられることはなかった。しかし、近年河川法の改正により環境の項目が加えられ、田中の住民の立場から保護を訴えた「治水論」の内容は、今後の方向性を検討する上でも貴重な論点となる。また、田中は、小学校教育で既に取り上げられている人物であることから、田中の思想の再評価は、今後必要となるわが国の環境問題の学習の一助になるものと考えられる。

田中の義人像としての人物や人権・自治・平和・生命尊重思想などの政治思想に関しては数多くの研究がある。その中で「治水論」の内容は、水の思想として指摘されている¹⁾。中村ら（2009）²⁾では、市民団体が田中の「治水論」を治山治水論として評価し、植樹ボランティアが活動の中に受容した経緯を追っている。さらなる展開として、田中の計画者としての立場や技術そして「治水論」における河川工学的な計画思想の存在について考察する必要性が出てきた。

本研究では、足尾銅毒事件の被害民の立場から河川流域の保護の必要性について実践を通して述べた田中正造を取り上げる。そして、現代の渡良瀬川流域の市民団体の築いている河川流域計画思想へ、具体的に田中のどの要素を受け継いで継承しているのか、その特徴と意義について考察することを目的とした。

主なデータは、文書とする。田中に関しては日記や書簡が集録された、「田中正造全集」という全19巻からなる著作集が発刊されている。現代の市民団体の河川流域計画思想に関しては、公刊・行政資料・関連論文・文献・市民団体による機関紙・新聞記事・現地調査から田中及び渡良瀬川流域に関する記事を抽出し分析する。計画思想の潜在的な側面として当時の状況を詳細に把握するため関係者へのヒアリングを行った。

本研究では、本章に続き2章で渡良瀬川と足尾銅毒事件の経緯を追ひ、3章で田中の技術と立場そして「治水論」の内容について考察する。4章では現代の渡良瀬川流域の市民団体による計画思想³⁾を述べ、5章で田中の「治水論」を渡良瀬川流域の市民団体の計画思想と比較し現代への継承を考察する。6章で、田中の「治水論」の現代的意義についてまとめる。

2. 渡良瀬川流域の経緯

（1）足尾銅山の発展

足尾銅山は1550年頃に発見され、1610年江戸幕府の直山となり、当初江戸城や将軍ゆかりの増上寺、日光東照宮など社寺の主に銅瓦として使用されていた。

幕末には、休山同様の状況で明治政府に接収され、県営⁴⁾で操業後、1872年民間に払い下げられた。1877年古河市兵衛が足尾銅山の経営を開始し、洋式手法による鉱源開発を行った。1884年新たな銅発見以後、急激に発展することになる。

図-1 足尾銅山明細図(1889年)⁵⁾

*東京大学大学院新領域創成科学研究科 **東京大学大学院農学生命科学研究科

その結果、製錬所などから排出される鉱毒による被害が1878年頃渡良瀬川の洪水とともに公害問題を引き起こした。1880年代後半頃から鉱毒被害が顕在化していくこととなる。足尾銅山より流出する鉱毒から災害を受けた渡良瀬川下流域の農民たちが、その保障及び補償問題で請願運動を起こす。これらの被害の訴えや状況は、田中により社会問題へ進展する。これが、足尾鉱毒事件である。

(2) 渡良瀬川流域の鉱毒被害

鉱毒被害は主に、土壌水質汚染と大気汚染の2つである。

土壌水質汚染に関しては、度重なる洪水が鉱毒を下流域に運び、渡良瀬川沿岸各地で農作物や川魚などに影響を与えた。その後も洪水の度に、鉱毒の被害が拡大化している。

大気汚染は、製錬所周辺及び周辺地区一体に影響を与え、桑の木が全滅し養蚕ができなくなる。排煙に含まれる亜硫酸ガスが周辺山林や峡谷に滞留し、草木を枯らし、全山荒廃裸地化することにより、土壌を侵食するなどの問題を引き起こした。

1897年明治政府は古河市兵衛に対し、大規模な「第三回鉱毒予防工事命令」を発した。その内容は、①沈殿及びろ過池の設置とその処理、②廃石、カラミの堆積場の新設及び適正管理、③脱硫塔、煙道の設置及び煤煙の適正処理、④坑水、廃石などの流出防止のための諸工事であった⁶⁾。しかし、予防工事後後も鉱山被害は沈静化せず、さらに広がりを見せ、1906年の谷中村廃村の事件へとつながっていく。

3. 田中正造の「治水論」

渡良瀬川流域の環境被害が拡大していく中で、鉱毒反対運動を展開した田中はどのような立場であったのか。さらに被害民を守ることを前提として自然環境へどのような考え方を導き出したのか。田中の全集と関連論文から田中の技術と立場、田中の「治水論」について考察した。

(1) 田中正造の技術と立場

田中は、1841年11月3日下野國小中村（現在の栃木県佐野市小中町）に生まれる。17歳で、小中村六角家知行所の名主⁷⁾に選ばれる。村人を指揮しての開田事業、及び水争いによる権利の責任者としての仕事を行っている。

1870年、江刺県花輪分局（現在の秋田県鹿角市）の官吏となる。村々を巡回し農民の現実を克明に記録している。そして、石堤や砂堤、竹を植栽する場合の心得について、用水施設の図をいくつか書いている⁸⁾。

この名主と地租改正担当員の立場を通して、地域の計画者としての役割を担う。そして、治水技術者の心得や具体的な工法については主に経験を通して独学で学んでいたと考えられる。

1878年区会議員として、政治活動を開始する。廃刊となった栃木新聞（現在の下野新聞）を1879年に再刊して編集長になり、紙面上で国会の設立を訴えている。1880年に栃木県議会議員に当選する。1882年に立憲改進黨が結党され、入党している。1886年には県会議長を務めている。1890年に第1回衆議院議員総選挙に初当選する。1891年に、渡良瀬川の鉱毒の害を視察し、第二回帝国議会においてはじめて「足尾銅山鉱毒の儀につき質問書」を提出した。1896年に永久示談の不当性を追及する質問を提出する。そして、群馬県邑楽郡渡瀬村（現在の群馬県館林市）の雲竜寺で演説を行う。

1897年になると、農民の鉱毒反対運動が激化する。1900年川俣事件が起こる。翌年田中は、議員を辞職する。そして、明治天皇へ直訴を行うことになる。

1902年に渡良瀬川下流に貯水池を造る計画が浮上する。はじめに予定地となった埼玉県川辺村・利島村の計画は白紙となり、翌年、栃木県下都賀郡谷中村が貯水池になる案が浮上する。田中

は、1904年7月から谷中村に住み始め、以後1913年死去するまで、その主張のほとんどは貯水池計画への反対運動のため下流域住民の立場から論じられている。

主に、田中の立場は、名主と官吏、次に議員、そして谷中村住民としての立場と3つの時期に区分されるものと考察される。さらに、名主としての住民をまとめる立場の責任感が生涯貫かれ、その技術が生かされ熟成していったと考えられる。

図-2 田中正造⁹⁾

(2) 田中正造の「治水論」

渡良瀬川流域の自然環境が激変していく中で、鉱毒反対運動を進めていった田中は、どのような「治水論」を論じたのか。

田中は、足尾鉱毒問題を下流域で発生している被害を含め認識し、そして谷中村の治水問題のあり方を提示し、国の治水費に対しても意見を述べている。終始一貫して被害民の立場に身を置き、晩年には、河川の洪水への対応の考え方と技術を記述している。主に、1909年2月「治水論考」において「河川治水の本義は、天然の地勢を順用するにあり。水勢の赴く所に任せて是れに干渉せざる」としてその考えをまとめている。

田中は、源流域での森林伐採による影響だけではなく、利根川の大規模な河川の直線化など人工的に流路を変更する手法を強く批判し、江戸時代に改修された構造をも非難した¹⁰⁾。そして、洪水を前提とした低水法を支持することとなる。それは、水の性に対する深い洞察を必要とし、川の自然力の把握を基本としている。さらに、治水のために河川流域に形成された古来天然の風致を損なうべきではないことを述べている¹¹⁾。実際に、行政の破堤所復旧工事放棄もあり、1902年住民をまとめ工事を行っている。地図や図面もいくつか残されており、1909年には栃木県にも河川構造の改修案を提出している¹²⁾。記録として、洪水による鉱毒被害や流域の状況も克明に図面にしている¹³⁾。地形を読む技術について、「宅塚は尚山水の一部なり。（中略）主人に於ては全然天地山水の理を知るものなし。断じて知るものなし。（中略）庭園家屋は天地の大なるあり。何を苦しんで之を造る事をせん。」¹⁴⁾と造園の知識を利用する必要性を述べている。田中の河川技術の根本は、名主・官吏時代に培った伝統的河川工法によるもので、その考え方は晩年、地形水理を重んじている。

この河川技術に基づき、まず水源涵養のための治山を言及している。荒廃した山への植林と、天然の地形に沿った治山の必要性

を述べている。治水に比べて治山に関する深い考察の記述は少ないが、繰り返し乱伐による悪影響を訴えている。治山の技術について、造園の心を持って行うことを良しとしている¹⁵⁾。

次に、水の性に対する治水を基本として、山河一体について言及している。田中は、洪水による流量の変化など、谷中村住民を連れて利根川水系全体の治水調査を試みている。1910年8月から1911年1月にかけて流域住民に対して聞き取り調査を綿密に行うことによって流域全体を把握しようとしたのである。

これらの河川技術と考え方に対応した人間活動として、「山河川の骨脈組織に順じて太古より自然に作られたる村落の状態」¹⁶⁾を本来のあり方としている。田中は、「人は此の天然の地形に依りて定められたる天与の生活を楽しみたりき。」「古今大小の事業、耕作、漁獵一として此の天然の区画に依りて決せられざること無し。」「土地に附著して生活する農民は安りに移動せしむべきものに非ず。」と述べている¹⁷⁾。自然環境の働きに沿った人間活動のあり方として、河川の最も自然な状態を受け入れ生活するべきであることを理想としている。

以上から、田中の治水論は、技術として「地形水理による伝統的河川工法」を述べ、その根本となる考え方は「水源涵養としての治山」と「山河一体の治水」、そして「天与の生活を楽しむ人間活動のあり方」の主に4つの側面にあると言える。田中の記述は、何れも各論ではなく、相互扶助的に作用するように総合的に論じられている。

4. 現代の渡良瀬川流域の市民団体における計画思想

現代において渡良瀬川流域の市民団体¹⁸⁾は、どのような計画思想を形成しているのか。本章では、まず渡良瀬川流域の市民団体の特徴を述べ、計画思想については市民団体の機関紙¹⁹⁾・新聞記事・雑誌記事・関連論文・現地調査より撮影した看板やポスター・感想文²⁰⁾・ヒアリング²¹⁾の内容から分析した。

(1) 渡良瀬川流域の市民団体

渡良瀬川流域で最初に設立された市民団体は、渡良瀬川研究会(1973年設立)である。以後、田中の学習を中心とする団体が5団体設立されている。

足尾に緑を育てる会(1996年設立)は、下流域の市民団体である渡良瀬川研究会と渡良瀬川にサケを放す会、田中正造大学、さらに上流域の市民団体であるわたらせ川協会とあしおネイチャライフ92'、この5団体が事務局となり設立された。その後、植樹ボランティアは広まり、一般の植樹ボランティアに加え、地元以外の市民団体が9団体存在している。

また、渡良瀬遊水池をラムサール条約登録地にする会(2006年設立)は、谷中村の遺跡を守る会、小山の環境を考える市民の会、渡良瀬の環境を考える会、田中正造大学、日本野鳥の会栃木県支部、ラムサール条約湿地を増やす市民の会の6団体により設立されている。

一方で、渡良瀬川流域の清掃を目的とした10団体、まちづくりを目的とした5団体が存在していた。他に渡良瀬遊水池を守る利根川流域住民協議会(1990年設立)や渡良瀬ネイチャリングアクト(1993年設立)などの保全団体がある。

以上から、渡良瀬川流域の市民団体は、①渡良瀬川研究会にみられる田中正造に関する学習の蓄積、②足尾に緑を育てる会と渡良瀬遊水池をラムサール条約登録地にする会など、相互交流により渡良瀬川流域の自然環境への働きかけとして必要な目的を達成したい場合にその利害を共有した上で、連携団体を形成、③田中正造の学習を介さず保全団体を設立、これら3つの特徴があることを述べた。

(2) 市民団体における河川流域計画思想

渡良瀬川研究会を設立したF氏は、熊本県水俣市の水俣病の

現場をきっかけとして「鉱毒の教訓を伝えるため」田中の研究と学習をはじめた。そして、「行動なくしては学んでいると言えない」と実践を重視し、会員各々の立場で公害問題への支援活動を行っている。渡良瀬川鉱害シンポジウムをいくつかの団体が協力して開催するなど、この団体の研究と学習の蓄積が、田中の学習と流域を繋ぐ思想を形成している。

渡良瀬川にサケを放す会の1982年最初のサケの放流において、渡良瀬川研究会のF氏によってスローガン「足尾に緑を渡良瀬に清流を」が提示された。はじめてサケの遡上が発見された際には、石碑が建立された。この言葉は、足尾に緑を育てる会においてもスローガンとして利用されている。

将来イメージとして、鉱毒の被害を受ける前後の状況が記述された「活ける渡良瀬、死せる渡良瀬」²²⁾の言葉を象徴として描いている。上流域の煙害の影響から廃村となる以前の松木村のように人々が山と共に生活できるようになるまでを望んでいる。また、谷中村の遺跡を守る会は、谷中村の遺跡に訪れた人々によるその場への感想文の収集や、谷中村住民に関する研究を続けるなど場の記憶の保存を計画思想としている。また、裸地となった足尾地域では、感想文や草木塔の石碑を通して豊かな森のイメージが個々のボランティアによって描かれている。

一方で、渡良瀬遊水池を守る利根川流域住民協議会は、わたらせ未来プロジェクトの事業を2001年に立ち上げ、遊水池に関する計画を立てている。現在の遊水池の自然環境を把握し、豊かな湿地としての機能の保全を計画思想としている。また、渡良瀬ネイチャリングアクトは、釣り場の維持を保全の背景としている。

一方で、渡良瀬川流域の清掃を目的とした団体、まちづくりを目的とした団体、他に渡良瀬遊水池を守る利根川流域住民協議会(1990年設立)や渡良瀬ネイチャリングアクト(1993年設立)など、特に1990年以降に設立された団体では、足尾鉱毒事件に関する知識や田中研究からのアプローチではなく、流域の自然環境保全の観点から活動している点に特徴が見られた。

以上、流域全体を繋ぐ活動に展開するための思想を形成し中心となった団体が、田中の学習を活動の目的とした渡良瀬川研究会であることを述べた。また、初期の市民団体は、いずれの団体も田中の思想もしくは足尾鉱毒事件を契機として設立されている。比較的新しい団体は、渡良瀬川や渡良瀬遊水池を利用して自然環境を豊かに保全するという考え方によって、活動を展開している傾向があった。

5. 田中正造の「治水論」と現代への継承

前章において渡良瀬川流域の市民団体の活動は、田中の思想を土台に学習を通して連携して活動を展開していることを述べた。

田中は、「治水論」の考え方に則り、根本的解決策として以下3つを方針としている。

1) 利根川を埼玉県葛和田の辺りより南下させ、隅田川に流下させること。関宿の棒出しを撤去すること。これは、15世紀以前の古来の姿に戻すことを目的としている。

2) 江戸川を通して東京湾に流す方法。栗橋鉄橋の左右を切り広げ水の停滞を防ぐこと。

3) 水源地の山林を涵養すること。

これらは、自然の勾配差を利用した利根川南流論・江戸川主流論である。田中の伝統的河川工法の考え方は、低水法を支持するものであり、水の性への洞察に加えて河川流域の地形に沿った河川構造の実現を目指していた。

一方で現代の市民団体の活動は、まず、鉱毒事件の知識と旧谷中村など場の記憶を保存すること、次に、鉱毒被害の影響の観察に加えてサケを放流することと山林の涵養のための植樹による自然環境を回復すること、さらに近年では、自然環境を保全するこ

との3つにある。

現代の市民団体が、河川構造へ田中の考え方や技術をそのまま用いて活動することは難しい。田中が天然の自然環境に順じた保護を目指したものと比較して、現在の自然環境に順応している活動とも言える。市民団体による田中の研究と学習、及び谷中村の遺跡を守る会の活動の中に、歴史の保存と知識の蓄積という方向性で、伝統的河川工法の手法は保持されていると考えられる。

次に、植樹ボランティアは、田中の「治水論」を学び、治山をやり残した仕事として位置づけ継承をしている。田中の治山の考え方は、あくまで治水を主眼とした水源涵養のための治山であった。さらに、治山には造園の心を持つことを勧めてはいるが、その具体的な技術や計画に関しては述べていない。現代の植樹ボランティアの活動では、「下草刈りして植えた木の世話をすれば、やがて自然が回復していく実感があります。」と述べている。自然環境を回復させていく活動の中に、自然環境と人間活動のあり方を論じている。現代において水源涵養の治山の考え方は、足尾に緑を育てる会を中心とした市民団体を設立して実践的に展開している。新たに植樹を通した活動の考え方として、自然環境との接し方や将来イメージなど治山の技術や計画が加えられている。

田中の山河一体の考え方は、渡良瀬川研究会のF氏の述べた「足尾に緑を 渡良瀬に清流を」の言葉に象徴されている。渡良瀬川にサケを放す会では、渡良瀬川が清流に戻る証としてサケの稚魚の放流と遡上の確認を行っている。この言葉は、足尾に緑を育てる会や渡良瀬遊水池を守る利根川流域住民協議会が、活動の方向性としている上流域と下流域の市民団体を繋ぎ合流させ活動する方法の中に具体化されている。

そして、田中の行った治水調査は、住民意見の把握として重要性がある。現代の市民団体では治水を目的とはしていないまでも、活動を展開する前に、まちづくりの方向性など住民意見をまとめるためのアンケートやヒアリングを行っている点に共通性がある。

田中は河川流域の人間活動について、生業として自然環境と接することを目指している。現代では、将来イメージとして、足尾の裸地を生業の場としての山林へ回復することを描いている。しかし、現代は、あくまでボランティアでの参加である。市民団体の活動は、余暇やレクリエーションに近い感覚で自然に近づく傾向として楽しむという考え方そのものを発展させている。

以上から、田中の「治水論」は、現代の市民団体の学習を通して活動の中に継承され、さらに新たな展開と広がりが見られることを指摘できる。つまり、田中は鉍毒被害に対する生活保障のために徹底して保護論を述べていたのに対して、現代の市民団体は、鉍毒問題は残されていることを認識した上で回復や保全など環境に順応する具体的な活動へと結び付けている。

6. 結論

結論は次のように導かれる。

田中の「治水論」は、主に「地形水理による伝統的河川工法」「水源涵養としての治山」「山河一体の治水」「天与の生活を楽しむ人間活動のあり方」の4つにあることを述べた。

現代において、田中の綿密な学習を通してその考え方や思想を、活動に展開させた団体の中心が渡良瀬川研究会であることを述べた。渡良瀬川研究会は、田中の「治水論」を継承するために内容を厳密に理解した上で、活動の中で自然環境の回復や治山治水論として広義に捉えられたものと考えられる。そして、新たな展開として田中の学習に主軸を置くのではなく、自然環境保全を目的とした市民団体が発生している。これらの各団体は、役割分担して各々連携しながら活動することによって、田中の「治水論」の思想を繋いでいると言える。

田中が自然環境の働きに沿った治水と人間活動のあり方をあく

まで保護論として述べたのに対して、現代の市民団体では、過去の自然環境に向けた回復と同時に、自然環境に順応する傾向が見られるものと考えられる。

我が国の河川計画は、1896年の河川法以後、近代科学技術を推進し、堤内地の流水のみを扱い、河川を直線化してなるべく早く海まで流過させることを目指すこととなる。また、近年の治山は、森林法及び一部砂防法が適用される。その管轄は、土地利用によって分断されており、総合的に管理するという側面において脆弱性がある。その点、田中の「治水論」は、主に河川法成立以前の伝統的な考え方を主に重んじている。総合的な河川計画の理論は、現代において参考になる観点が多くあるものと考えられる。

また、現代の河川と人間活動のあり方は、人は自然から離れ、関係を築きにくい傾向にあると言える。ボランティアによる自然環境活動のあり方は、田中の「治水論」における比較考察の結果から伝統的河川工法の考え方に近いものである可能性があり、今後の研究課題である。

謝辞：足尾に緑を育てる会の関係者の皆様、渡良瀬川研究会の布川了氏、田中正造大学の坂原辰男氏に、心からの感謝を捧げる。

補注及び参考文献

- 1) 小松裕 (2001) : 田中の近代 : 現代企画室, 576-595
- 2) 中村愛子・下村彰男 (2009) : 足尾砂防地区緑化事業の植樹ボランティアにおける計画思想に関する研究 : ランドスケープ研究 72(5), 455-458
- 3) 中村は、河川流域の保全過程における市民団体の活動を広義の計画として捉え、各市民団体の位置づけ、内容、参加者各々の発言から計画思想を分析。(中村愛子・熊谷洋一 (2006) : 野川の保全過程における計画思想に関する研究 : ランドスケープ研究 69(5), 361-364)
- 4) 足尾銅山は、1868年日光県の所管、1871年廃藩置県により栃木県の所管となる。
- 5) 栃木県博物館第71回企画展・佐野市郷土博物館第37回企画展 (2007) : 特別企画展「田中とその時代—天皇直訴100周年—」: 栃木県博物館・佐野市博物館, 37
- 6) 脱硫酸の建設等の古河の対応も亜硫酸ガスを完全に排除することはできず、1956年に紛鉍処理主体の自溶製錬が開始される。翌年に前橋営林局、栃木県林務部、建設省 (現在の国土交通省) 渡良瀬川工事事務所の三者協議により事業分担を決め本格的な植樹事業が始められた。
- 7) 名主とは、江戸時代に、有力農民・町人から任命され町や村の公務を行った責任者。現在の町村長にあたる役目。
- 8) 田中正造 (1977) : 田中正造全集第9巻 : 岩波書店, 83-94
- 9) 前掲書 5), 20
- 10) 田中正造 (1978) : 田中正造全集第12巻 : 岩波書店, 550-551
- 11) 前掲書 10), 254
- 12) 前掲書 5), 100
- 13) 田中正造 (1980) : 田中正造全集第5巻 : 岩波書店, 467-482
- 14) 前掲書 10), 237-238
- 15) 田中正造 (1977) : 田中正造全集第13巻 : 岩波書店, 466
- 16) 田中正造 (1977) : 田中正造全集第5巻 : 岩波書店, 17
- 17) 前掲書 16), 15
- 18) 市民団体は、活動内容を一般に公開していることを前提として、渡良瀬川を活動場所の対象としており、自発的な団体であることを条件とした。各団体のHP及び現地調査から、45団体を抽出した。
- 19) 市民団体の機関紙は、渡良瀬川研究会の「田中正造と足尾鉍毒事件」「わたらせ川通信」、田中正造大学の「救現」「田中正造大学通信」、わたらせ川協会の「わたらせ川」「わたらせ川協会事務局通信」である。
- 20) 1999年から2006年にかけて体験植樹に参加した小学校118校から国交省及び育てる会に自主的に寄せられた感想文。
- 21) 上流域の調査は、2007年5月7日から13日、5月18日から6月16日にかけて体験植樹に参加した関係者、イベント毎の一般ボランティア、スタッフ会議への参加、育てる会スタッフ10名、足尾町住民5名に対し筆者がヒアリングを行った。
下流域の調査は、主に2007年8月から2009年8月にかけて、シンポジウムやイベントへの参与観察、スタッフ数名へのヒアリングを行った。
- 22) 東海林吉郎・布川了 (1977) : 亡国の惨状 復刻版 : 伝統と現代社, 31-33